opusdei.org

家庭は成長の場(2)

「家庭は成長の場」の後半では、マナー、規律、ユーモアのセンス、祈りの生活などの家族で習う要素を取り上げます

2020/08/07

昔の合戦について暖炉のそばで熱い 議論が交わされている。一人が誰も 思ってもみなかった発言をした。

「そういった武勲に引けを取らないような、困難でかつ輝かしい勝利や 戦いや偉大な犠牲や英雄的な高貴な 行為(一見すると、軽率で矛盾に満 ちたように見えるが)がある。それ が難しいのは、それについてのは、それについな見る観衆しいないしたれを見る観衆の最もだ。しかし、毎日社会の中で、るの中で、るの明女ので行わいの目立たない戦いである。これでも、も生きる声でした。 ないる人間への信頼と希望で満たできる。

人類の将来は外交の重要な条約によってだけ決められるのではない。 日々の戦いにおいて、平凡な家庭のなかの「忍耐強い愛」(フランシスコ、2013年10月27日の謁見)の仕事よって作り上げられる。生涯にわたる人間の成長、特に「中に向かって成長する」(『道』294)ためには、どうしても多くの人の協力が不可欠である。みんなが一緒になって、霊魂の帆に神の息吹を受けなが ら、神のペースで前進するのである。

同じ空気を呼吸する

家族のよい雰囲気を維持するという 仕事には、全員が重要な役割を持 つ。最も小さい子供も例外ではな い。そのため、小さい子供たちにも その年齢に見合った責任を分担させ るのがよい。それは、彼らが自己中 心にならず、家はみんなの協力で支

えられることを理解させるためであ る。たとえば、庭に水をやること、 テーブルの準備をすること、布団を 敷くこと、自分の部屋を片付けるこ と、下の兄弟の面倒を見ること、買 い物に行くことなどなど。また、少 しずつ家族の話し合いにも参加させ ていくこともよい。家族の計画を押 しつけるのではなく、彼らの意見を 聞きながら決めていくことで彼らに も魅力のある計画となるだろう。こ うすれば、誰も蚊帳の外に置かれる ことはなく、他の人々にも関心を払 う開放的で寛大な熊度を涵養できる だろう。

愛情があれば、他の人の生活に歩調を合わせることができる。そのためには、休暇を一緒に過ごすことや楽しな話がつけ多くのよいことを楽しむことを可能にする活動を一緒にすることなどは役に立つ。逆に、苦しいことに直面するとき、愛情はその重荷を分け持つようにさせる。「互

いに重荷を担い合いなさい。そのよ うにすれば、キリストの律法を全う することになります| (ガラテヤ6・ 2)。自分の家では誰も他人のよう に生きることはできない。つまり、 自ら進んで何ができるかを考え、目 を上げて周囲の人に注意を払う必要 がある。他の人たちは何が好きなの か、どういう計画を考えているの か、どういう友達がいるのか、仕事 は何か、何か心配ごとがあるのか、 など。これらのことを考えるには時 間が必要である。しかし、まさにこ の時間こそ、父親が子供に与えるこ とのできる、また子供が親に与える ことのできる最も価値あるものなの である。

キリスト教的家族にも規律や秩序が必要だ。しかし、その規律は優しさを感じさせるものである。そうであれば、子供は年上の家族の背中を見ながら、自然に少しずつ学んでいく。子供をしかるときには、愛情を

裏に秘めた丁寧な仕方でするべきで ある。それだけでなく、なぜしかる のかそのわけを説明し、「自分の不 機嫌を他の人々にぶちまけない| (『知識の香』174) ように努め る。はっきりと物を言うべきときも あるが、子どもが徳や価値観を本当 に身につけるのは、親がそれを実践 しているのを見るときであることを 忘れてはならない。日常生活の中で 親が剛毅、節制、慎み、質素などを 実践しているなら、子供はそれらを 本当に大切なものと自覚するだろ う。彼らにとって、それらの徳は空 気のように当たり前のことになるか らだ。これは特に愛情の教育(性教 育)において言える。つまり、両親 が日常生活の中で細やかな愛情を互 いに示すなら、――もちろん夫婦の 間の親密さの中にしまっておくべき ものは別として――子供たちに性の 正しい積極的な意味を理解させるこ とが容易になるだろう。

ありがとう、すみませんが、ごめん なさい

明るく楽しい家庭には、うちとけた 単純な人間関係が存在する。同時に 親しいからといって、細やかさに欠 けた無礼な態度を取るわけではな い。私たちは誰でも欠点があり、し てはいけないことをしたり、他人を 傷つけたりする可能性がある。他 方、他人の無理解や誤解を前にして も、恨み心を抱かず、気にしないと いう能力も持っている。親子、兄弟 の間など、あらゆるレベルで、ポジ ティブな面、分離させるのではなく 一致させるよい面に目をやるよう努 める。どのような共同生活でも、 時々口論やけんかが起こるが、その 日のうちに仲直りするべきである。 「よく聞いてください。夫婦げんか をしたことがありますか。子どもの 皆さん、皆さんは両親とけんかをし たことがありますか。大げんかに なったことがありますか。それはよ いことではありませんが、本当に問 題なのではありません。問題なの は、その気持ちのまま次の日を迎え ることです。けんかをしたとして も、家族と仲直りをしないで一日を 終えないようにしましょう | (フラ ンシスコ、2015年5月13日の謁 見)。

本当に隣人を愛する人は、隣人を理 解し赦すことができる。いや、理解 し赦すことを必要としていると言え る。そういう人はこの振る舞いを家 庭から社会に伝えていく。ジャング ルを開拓したいなら、まず自分の庭 から始めよう。つまり、「自分の部 屋で、自分の家で、自分の職場でし 表される「日常生活のエコロジー」 から手をつけるのだ(フランシスコ 『ラウダート・シ』147)。家庭と は、「人格的成熟における調和のと れた成長を可能にする全人的な教育 を受ける | 場である。「家庭の中で わたしたちは、無理強いせずに頼む こと、受けたことに対する心からの 感謝の表現として『ありがとう』と いうこと、攻撃や強欲を慎むこと、 傷つけてしまったらゆるしを請うこ とを学びます」(前掲書、213)。

こういう態度を身につけるなら、家 族生活に起り得る問題を相対化で き、違った状況ならもっと簡単だろ

うにという幻想に陥ることを免れ る。わたしたちには外の人のことを 理想化する傾向がある。均衡のとれ た精神の持ち主でさえ、友人や知人 のよい点を過大評価し、身近な家族 の欠点や過ちを必要以上に厳しく見 ることも珍しくない。我々がこのよ うな傾向を持っていることを自覚 し、矯正することは極めて大切であ る。たまにしか見ない人が笑顔や親 切な行為を示したとしても、それが 彼の常の姿というわけではない。逆 に兄弟姉妹が、いやな一日を過ごし たりよく眠れなかったりしたため、 無愛想な態度をとったとしても、そ れが彼らの真実の姿でも、心中の思 いを表しているのでもない。それだ けでなく、人は信頼している人の前 では、自分の本当の姿をさらけ出し やすくなり、そのために容易に否定 的なコメントが出てくることがある ことも思い出すのがよい。そのよう な状況では、真の愛情を持つ者は、 相手の苦しみを理解しようと努め

る。時には、その人の愚痴や不満の 聞き役を買って出ることも敢えてす るだろう。

人の成長ということは、それぞれの 困難を伴う諸段階を経ながら達成さ れるもので、多大の忍耐が要求され る。人は一朝一夕に成熟するもので はない。とりわけ思春期の子ども は、ある程度の期間、家庭の空気を ぴりぴりさせ、時には対立を作りだ し、大人も子どもも緊張した雰囲気 に包まれる。しかしそれも時間が解 決してくれる。その危機を上手に乗 り越えるなら、それが終わると家族 はより強固になる。水は河床に戻る だけでなく、より豊かにきれいな水 になるのだ。

自然の法則に従って、思春期に入った子どもたちはより大きな自由を主張し始め、家族とは離れて、閉鎖的な友人グループを作り、一人で行動しようと試みる。しかし、たとえ本

人は認めなくても、彼らは高親のはことではない。それではな舞はなったわけな振るのではないないないないではないないないではないないではないではないであるないである。にすでももいっているのでは多くのであるにないであるにないが、よりによってよりよく伝わる。

いずれにして、子どもを信用することが重要である。というのは、相自ないの信頼関係があるところでのみりまるを、聖ホセマだののもながらだ。「時にはだれているのもよいでしょう。子供したときにでしまりが、は親の信頼を濫用したときくなが、子供自身が恥じてもとなったといるがあれば親のにするといるといるがあれば親のにないと感じるような状

態なら、子供はいつも嘘をつきたい 衝動にかられるのではないでしょう か」(『会見集』100)。

一緒に祈る家族は一致を保つことが できる

家族はまた神とのつきあいを学ぶ場、祈りの学び舎でもある。聖ホセマリアは子どものとき母親から習った祈りをとても大切にしていた。

「母親なしには、新しい信者は生まれません。それだけでなく、信仰そのものからも、純粋で深い温かみにとんど失われてしまいます」(ランシスコ、2015年1月7日の謁見)。普通は両親が子どもに信仰の遺を教える。しかし逆の現象も子どもない。神の御摂理は、時に子どもくない。神の御摂理は、時に予しるを発見させることもある。

多くの場合、家族が一緒に祈ること は可能であり、有益である。「とも に祈る家族は一致を保ちます」(聖

忠実な夫婦の家庭からは新たな忠忠な夫婦になる若者が生まれる。また神の召命に答え、独身の召しだるの若者も生まれるので進む多くの若者も生またのではなる。ののではないでも、大生の体にと強化する。いたしたちのはなる場面でも、わたしたちのははなる場面でも、おいる。たとえれなるは事や義務によって遠くに離れてなける。

暮らしているとしても、家族は一致している。成熟の一つの印は、妻や子ともへの義務と、自分の両親や子の愛情を両立させる能力である。それは時とともに身につけないるである。この二つの家族はない。「兄弟に助けてもりにない。「兄弟に助けてもらう人は強い城のようだ」(箴言18・19)。

家庭から周囲の世界に

家庭という豊かな泉は、家庭内で枯れ果ててしまうのではない。人は自分を忘れて回りに奉仕することに表って成熟するのとで成長するの世界に開くことで成長のたがの世界に開気とプライバシを要な家族の雰囲気とプライができない。 要な家族の雰囲気とからでもない。 目をふさぐことでもない。

それゆえ連帯の精神はキリスト教的 家族の使命の重要な部分である。つ まり、創造性をもって自らの殻を破 り、最も困っている人々を探しに出 て、社会の文化や教育の発展のため に働き、共通の家である地球の保護 などにも気を遣うのである。人類が 直面する困窮は多種多様で、多くの 場合、あるイデオロギーや少数派が 緊急の課題として声高に訴えるもの とは別物である。家のない難民を助 けようとする家族、すでに子どもが たくさんいるのに新たに養子を引き 受ける家族、英雄的に経済的困窮に 立ち向かい、自分の家族や他の家族 のために自己を犠牲にする親たち、 他の家族を助けるために働く子ども のない夫婦、など、なんと素晴らし い模範がわたしたちの周りに見られ ることだろう。最もよいことに、 「すべては家族に返ってくる」。つ

「すべては家族に返ってくる」。つまり、これらの活動で一番利益を受けるのは家族自身なのだ。そして、このような家族によって社会は変

家族は孤立していない

家族がその成員に、また教会と世界にどれほどの善をなすことができるかを考えると心が高鳴る。同時にの家族が困難な時期に遭遇したる。しかし、家族はひとりぼっちのはない。多くの人々が、子どもかにはない。多くの仕事において親を助けるために時間とエネルギーを費やしている。

この小論を終わるに当たって、子育 てに多大の時間とエネルギーを費や したのに、結果が思わしくか、もり方を間違ったのではというを できたはずではないかり上げという をに打たれる場合をが、なもった 実際、悲しいことだが、なもった の親が可能な限りの善意をした が肉体的精神的問題を抱え、あると

きには信仰から離れたり乱れた生活 に陥ったりするのを見て苦しんでい ることか。もしこういう状態になっ たら、これからの対策を考えるだけ でなく、あの放蕩息子の父親をまね るときだと考えよう。子どもの自由 を尊重しつつも、彼が過ちを正した いという望みの発端が現れたら即座 に助けの手をさしのべる心構えを もって彼に会いに出向くのである。 そして天に向かってこう言おう。 「私の神よ、次はあなたの番です」 と。|親は忍耐強くなければなりま せん。待つよりほかに何もできない ときもしばしばあります。祈りなが ら忍耐、優しさ、寛大さ、そして慈 しみをもって待つのです」(フラン

ウェンセスラオ・ビアル

シスコ、2015年2月4日の謁見)。

pdf | から自動的に生成されるドキュメント https://opusdei.org/ja-jp/article/kazokuwa-seicho-2/(2025/11/29)